

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	安井俊一
主 論 文 題 名 : J. S. ミルの社会主義論— 体制論の倫理と科学			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本稿はミル (John Stuart Mill, 1806-73) が生涯問い続けた経済体制の問題に焦点をあてて、彼の思想形成と方法論を含む思想的特質からミルの主張を捉えることを目的とする。それは同時に、ミルの社会主義論に関する研究者の解釈の隔たりを縮める試みでもある。このような試みに意義があるのは、ミルの思想が多様性に富んでいることに加えて彼の表現が多義的であることによってミルの解釈が分かれているためである。解釈が分かれる主要な論点は、『経済学原理』(第3版)第4編第7章「労働階級の将来の見通し」の改訂をいかに評価するか、いかえれば、『経済学原理』第2編第1章「所有について」、遺稿「社会主義論集」、「将来の見通し」の章の三論文の関係をいかにみるかという点に関わる。というのは、ミルが「所有論」と「遺稿」、そして『経済学原理』以外の社会主義に関する諸論文における叙述には一貫性がみられるのに対し、「将来の見通し」の章の叙述にはミルの一貫性のある主張とは異質の思想が混在しているからである。その上、ミルは『自伝』で「将来の見通し」の章の改訂の意義を強調しているために、ミルの社会主義論の結論を「将来の見通し」の章に読み込む研究の流れと、「将来の見通し」の章に関するミルの言葉にもかかわらず、改訂の意義を重視しすぎるのを避け、ミルの思想の多様性を考慮にいれて社会主義論を解釈する研究の流れに分岐している。</p> <p>「将来の見通し」の章を重視する研究は、ブリス(1891)やアシュリ(1909)に端を発するが、その後シュンペーターの解釈(1954)が後世に影響を与え近年までその流れは続いている。これに対し、ミルの親友であるペインは個性を重視するミルの思想を考えると、社会主義と人間の自由の思想の間には隔たりがあるので、ミルの真意は第3版の改訂ではなく「遺稿」にあるという(1882)。そしてロビンズが「将来の見通し」の章の変化を積極的に解釈する研究を批判した(1961)ことによる影響もあって、ミルが社会主義を批判する叙述に光をあてて解釈する研究は数多くみられる。問題はミルの妻ハリエット(Harriet Taylor Mill, 1807-58)が研究をまとめ、彼女の思想の混在している「将来の見通し」の章に対して、ミルが彼女の異質な思想を自分の思想体系の中に組み入れているのかということである。本稿は、ミルが功利主義、自由主義、経験主義の立場にありながら、分配的正義、労働の尊厳、勤労の組織化という社会主義者の目標を受容して、体制論をいかに展開したのかを探り、第3版の改訂を積極的に読む解釈とミルが情熱を傾けた社会改革の意図を評価することをしない解釈のいずれも、ミルの真意を捉えるのに十分ではないことを明らかにする。ミルは資本主義の改善と共産主義の理想の追求を両極として、いかなる制度が人類の幸を増進するのかという問題を未解決の問題とした。しかしそれはミルが優柔不断であるとか、改革を嫌う保守主義者であるということではなく、ミルが体制の問題を、教育により人間性を高め、人間の自由と自発性を最大限に発揮する制度を求めて、絶えず光があてられるべき倫理と科学の調和する問題としたということなのである。</p> <p>ミルの社会主義論における方法を、『論理学体系』における「実践の論理(アートと科学)」と比較体制論の方法として解釈し、ミルの思想的特質と関連づけると、ミルの思想がより明快に理解されるように思われる。ミルはベンサムから「実践の論理」を批判的に継承して、体制選択の鍵を人間の自由と自発性を最大限に発揮する社会制度として私有制の改善と共産主義の理想の追求まで広い語義のアソシエーションの実験を通じて実証的に探究することを体制論の課題とした。そしてミルは異なる体制における人間性の変化とその比較により制度選択を行う比較体制論を主張する。比較体制論は社会静学の分野に属し、具体的演繹法による。それは観察と実験による直接帰納にはじまり、演繹的な推論、論証を経て、他の経験的法則との比較による検証という操作を経るから経験主義的な方法である。</p> <p>「所有論」は社会静学の領域であるが、その結論は教育により人間性が向上し、人口が適度に抑制された状態での、改善された私有制と困難な問題を解決した共産主義との最善の段階における制度選択を主張し、結論は未</p>			

決となっている。この「所有論」の結論にはミルの功利主義、自由主義、経験主義の調和がみられる。「遺稿」は体系的なまとまりがあり、『経済学原理』以外の諸論文と一貫性があるので、ミルの社会主義論の最終的な立場を表明しているとみられる。「所有論」と「遺稿」との関係は、功利の原理を究極のオートとして人間の自由と自発性を最大限に発揮できる制度を比較しながら科学的に探究する主張は原理的に変わらない。ただ「遺稿」が「所有論」と違うのは、ミルが共産主義に対して好意的でないことと、私有制の永続性と所有の観念の可変性という体制についての両義的な思想を述べていることである。この両義的な思想には、私有制の改善と共産主義の理想の追求という幅広い体制の可能性が示唆されていると理解される。

他方、「将来の見通し」の章はハリエットが研究したアソシエーション論が含まれているため、上の諸論文に示されたミルとは異質の思想が混入している。すなわちこの章の第1-3節は労働者の自立による問題の解決、第7節は競争原理の叙述であり、『経済学原理』以前の論文や「所有論」におけるミルの主張と一貫性のある議論として読むことができる。ところが、第4-6節では、私有制から資本と労働のアソシエーションを経て労働者アソシエーションの体制へと（予想以上に近い将来）社会変革をとげることが予測される。「将来の見通し」の章は『経済学原理』第4編第7章であるから、社会動学の分野に属し、第4-6章の利潤率の傾向的低落論と定常状態論に続く章である。資本主義経済が利潤率低下の法則により定常状態に陥りその結果労働者アソシエーションへと体制移行するというのは、この部分だけをみれば理解される経済学の論理である。しかしながら、ミルの社会主義論をこの叙述だけで理解してよいとは考えられないのである。ミルは「将来の見通し」の章の初版と第2版で労働問題を含む社会主義論は、人間性に関わる社会哲学の問題なので経済学の論理だけで議論するのではなく、社会科学における他の成果を結集すべきであると述べている。更に労働者アソシエーションへの体制移行の予測はこの章が属する社会動学の方法として問題である。社会動学は逆の演繹法を用いて歴史的事象の継起の法則を探究する。だがこの動学の法則は経験的な具体的演繹法によって人間性の法則に合致するかどうか不断の検証がなければ科学になりえない。フランスにおけるピアノ製造工場の例など労働者アソシエーションの成功例をもって、私有制から労働者アソシエーションへの体制変革を予測するのは、ミルの方法によれば演繹的な推論だけで他の経験的な法則との比較による検証が不足している。ミルは一つの発展法則のみによって歴史が推移するというコントの歴史観を否定し、また、階級闘争の歴史家としてマルクスの先駆者といわれるギゾーの決定論的歴史観を否定した。労働者アソシエーションは体制の有力な選択肢の一つであっても、人類が探究すべき経験的な科学の対象である。ミルの社会主義論の結論は、「絶えず光のあてられる（「遺稿」）」、「人間性が向上した最善の状態と比較し選択される（「所有論」）、「未解決の問題（「所有論」および「第3版への序文」）」と解釈するのが、ミルの思想の全体像からみて違和感なく読めるのである。

ミルがなぜハリエットの思想を『経済学原理』第3版の改訂で挿入したのかという問題については、ベイン、パック、ボーチャード、ジェイコブズ、キャパルディなどのミルの思想形成の背景に関する研究、そしてハイエクが1951年にミル夫妻の往復書簡を公表してからなされた論争（ロブソン、スティリンガー、パップ、ミネカ、ヒンメルファルプ、シュヴァルツ、山下、矢島）などを参考にして、ミルが成人するまでの異常な家庭環境と父ミルの幼児教育によって育まれた精神的依存体質から推測すると、ミルの著作だけから疑問に思われる論点の背景の理解が容易となる。ミルは革命家ハリエットの思想を包摂するスケールの大きな思想家であるが、社会主義はミルにとっては科学の対象であったのである。